

IMAJ

NEWS NO.87

CAUX SWITZERLAND

OCT 1998

コー世界大会 '98 特集号

積極的に学び合う社会を目指して

1946年、スイス・コーのMRA世界会議場「マウンテンハウス」を会場に第1回目のMRAコー世界大会が開催されてから、今年で53回目を迎えました。今年は、「積極的に学び合う社会を目指して—新たな世界の創造」を総合テーマに、7月11日から8月23日まで6つの会議が開催されました。各会議平均300名が参加。特に「和解への鍵を求めて」のセッションには60ヶ国から約600名が参加しました。



CAUX 世界大会 '98 プログラム

- 7月11日～13日
 - ・学び合う社会
 - スイスの事例に学ぶ
- 7月13日～18日
 - ・産業人会議
- 7月19日～22日
 - ・コー円卓会議
- 7月31日～8月7日
 - ・新しい発見をもたらすための対話
- 8月9日～16日
 - ・過去を癒し、未来を築く
 - 和解のための鍵を求めて
- 8月18日～23日
 - ・21世紀にふさわしい新たな目的意識と価値感を探るための対話



■ 主な内容 ■

◆ 第52回コー世界大会・1-4P

- ・「和解への鍵を求めて」
- エチオピア、ソマリアなどの紛争地域からの代表を含み、世界60ヶ国から約600名が参加
- ・「産業人会議」

正しい価値観に支えられた未来の創造に向けて

◆ 第13回コー円卓会議・5-6P

- ・グローバル経済社会における節義あるビジネス
- リーダーシップ—課題と責任

◆ シリーズ視点・7P

- ・再びコソボ(ユーゴ)問題について

◆ 事務局通信・8P

- ・来日海外ゲスト(8月～10月)

◆ 別紙

- ・「コー世界大会参加体験記」
- 相馬 雪香 (社) 国際 MRA 日本協会 副会長
- ・「コー円卓会議に参加して」
- 稲岡 稔 (株) イトヨーカ堂 取締役渉外業務室長

THE CAUX CONFERENCE'98

◎過去を癒し、未来を築く

今年もコーには、世界中から様々な考え方や生活経験を持つ人々が集い、世界の諸問題解決に向けて真摯な話し合いを行った。



●ヨーロッパにおけるイスラム共同体のワークショップの様子。
(左から2番目がワークショップの責任者イサム・サジード氏)

(MRA機関紙「フォー・ア・チェンジ」から一部記事抜粋：翻訳 太田 敦之)

コー世界大会の特徴の一つは、会議のテーマいかに関わらず、正直な心と心の対話が出来るということである。これが今でも世界中から多くの人々を呼び寄せる原動力となっている。

「和解のための鍵を求めて」のセッションに参加したサラエゴ大司教は、90年以来毎年コーを訪れる理由をこう語る。「コー以外の会議では”知(マインド)”に出会うが、ここでは、”心(ハート)”、そして成功も失敗も含めた和解の経験を分かち合う人々に出会う」。また、イスラエルでユダヤとアラブ間の和解に尽力するユダヤ人学者は、「コーは信頼醸成に不可欠な、心を開いた双方向の対話を育む。ここでの焦点は“知”ではなく“心”だった」と述べた。

「21世紀にふさわしい新たな目的意識と価値感を探るための対話」のセッションに参加したロシア人教授は、次のように現在の世界における融和の重要性を述べた。「かつて諸文明は、それぞれの狭い世界の中に存在していたが、現在では共通の地球空間の中で相互に価値を認めながら全体としての

ハーモニーを作って行かなければならない。一方、偉大な文明の伝統は各地に深く根ざしているため、一つのイメージやテキストの中に収めることが出来ない。ここでは、対話を通じてのみ諸文明間の融合と相互理解が可能となる」

今年はこうした精神を基盤に、対話を主題とした会議が二つ開催された。一つはコミュニケーションの在り方と世代間の対話をテーマとし、もう一つは21世紀への目的と価値観をテーマに、個々人の生き方と、汚職・環境と精神性の汚染・多人種・多宗教社会等との関係について話し合った。

▼ 和解への鍵を求めて

エチオピア、ソマリアなどの紛争地域からの代表を含み、世界60ヶ国から約600名が参加

MRAでは90年代初頭から多くの民族・宗教紛争の解決を志す人々を対象にした「紛争の地域、紛争から回復しつつあ

コー世界大会豆知識

▼ MRA 世界会議場「マウンテンハウス」

スイスのジュネーブから車で1時間半、眼下にレマン湖を望む標高2,000メートルのロッシュ・ド・ネ山中腹の村コー(CAUX)にMRA世界会議場「マウンテンハウス」があります。

コー(CAUX)・マウンテンハウスの前身は1902年にオープンした「コー・パレスホテル」というヨーロッパ屈指の高級リゾートホテルでしたが、第二次世界大戦中は戦争避難民の収容施設として使われるなど、荒廃してしまいました。

戦後間もなく、「分裂してしまったヨーロッパの融和と世界平和のために、世界中の人々が集える場所としてこのマウンテンハウスを活かせないだろうか」と考えたスイス人外交官と、そのビジョンに共鳴したスイスの



95家族が私財を投げ打ってこれを買取り、多くの人々の勤労奉仕によって修復、MRAに寄贈しました。

MRAでは、この主旨にそって終戦翌年の1946年に第1回目のMRA世界大会を開催、以降毎年同じ場所で同大会を開催していますが、開催開始後5年間にドイツとフランスから延べ4,000人の人々が世界大会に参加し、和解を実現、後のEC設立の基盤作りの一翼を担うなど、対立する国々や人々の間に多くの融和を生む舞台を提供してきました。

サンフランシスコで対日講和条約が締結される前年の1950年に

THE CAUX CONFERENCE'98

る地域：お互いから学び合う」と題した会議が開催されている。新たな紛争の勃発、紛争の長期化、大国の調停失敗などのニュースが流れる中、年々参加者の規模が増大。そして96年のコー世界大会50周年記念大会では、日米のシンクタンクと共催で、過去50年のコーの紛争解決、信頼醸成、和解作りの経験を基に「和解への鍵を求めて」と題した会議が開催され注目を浴びた。今年もこの「和解への鍵を求めて」と題する会議に、世界60ヶ国から約600名が参加した。

今年もコーには、世界が注目する紛争地域から数多くの代表が参加したが、紛争・内戦などが絶えないアフリカ大陸からは15ヶ国の代表が参加した。敵味方乱れた内戦が複雑化しているスーダンの元副大統領は、紛争の長期化で一番苦しむのは弱者であると指摘。国境でエリトリアとの紛争の緊張が高まるエチオピアからは、エチオピア作家協会会長が、この紛争が地域の不安定化に拍車をかけることを強く訴えた。両氏とも外部からの和平調停、しかも武力に頼らぬ独立・中立の、紛争当事者の良心に訴えるような調停を切望していた。また、中央政府がなく、18回の和解調停に失敗しているソマリアからは、草の根からの平和作り、和解促進を行っている多民族グループがこれまでの自分達の経験を語った。ソマリアでは草の根運動に関わる女性、部族リーダー、青年、ビジネスマンたちの働きかけによって、18地域のうち7つが地方政府を樹立、内5つがソマリア初の連邦州となっている。

ヨーロッパにおけるイスラム社会との共生の道を求める

は、広島、長崎両市長を初め、財界人、労働組合代表、国会議員など72名からなる日本代表団がコーを訪れ、孤立していた日本が国際社会に再び迎えられための橋渡しの役目を果たしました。

その後も和解と融和のための対話の機会を世界中の人々に提供し続け、アパルトヘイト下の南アの白人と黒人の代表の対話や、フォークランド紛争直後のイギリス人とアルゼンチン人の対話を実現してきました。またベルリンの壁崩壊以来、次々と民主化を果たした東欧諸国からは、すでに数千人にのぼる人々がマウンテンハウスを訪れ、自由や民主主義の道義的・精神的基盤について学んでいます。

▼会議・ハウスでの生活

マウンテンハウスは世界各国からの参加者と一緒に世界の諸問題や自分の生き方について考え、問題解決のための経験やアイデアを交換し合う場でもあります。各会議では、全体会議の他、参加者がグループ毎に分かれて意見交換を行う分科会も用意されています。また食事やお茶の

ワークショップに、31ヶ国からの参加があった。各地のイスラム社会代表が、ヨーロッパに蔓延する無知と、無責任なメディアによるイスラム嫌悪に憂慮の念を示した。オランダでは警察がイスラム教徒を警察官に採用し始めているが、これが良い結果をもたらし、今では全ての派出所にイスラム教徒の警官がいるという。ワークショップの責任者イサム・サジード氏はこのワークショップの主旨を次のように述べた。「我々はいかに“違い”ということに対して敬意と寛容の心を持てるか、そしてお互いの社会への貢献を価値あるものとして受け入れられるかについて学んだ。他の人々が相手との非難合戦に夢中になっている間に、我々はコーという場所で自分自身とイスラム社会を真正面から見つめ、対話を始めた。無知は理解に変わり、過去の歴史が癒されるということをこのワークショップを通じて示すことが出来た」。また、韓国からは、国土統一院長官の意を受けて参加した駐ドイツ大使館の専門担当官が、朝鮮半島の問題についてワークショップを行い、イスラエルからも、イスラエル人とパレスチナ人の2人の議員がワークショップを行った。

会議の他にも、夜の部には演劇や講演会、コンサートなど毎日様々な文化的な催し物が行われた。プログラム最終日の



● “文化のタベ”で書道のデモンストレーションを披露する中国と台湾からの参加者

時間にも世界中の人々と打ち解けた雰囲気の中で交流することも出来ます。

マウンテンハウスのユニークな点の一つは、参加者が単に会議や催し物に参加するだけではなく、一人一人がハウスの運営にボランティアとして参加することになっていることです。例えば、料理、食事のサービング（給仕）、食器洗い、ベッドメイキング等は、それぞれのチームに分かれた参加者の協力によって行われますので、友人作りの良いきっかけとなるものです。また、夜は映画やコンサート、更に参加者が出演する世界各国の文化のタベ等様々な催し物が行われます。



THE CAUX CONFERENCE'98

前夜には、各国の参加者がそれぞれ自国の歌や踊りを披露する“文化の夕べ”が行われ、インドの各州から集まった若者の代表団はステージで得意のダンスを踊り、中国と台湾からの参加者は互いに協力し合って“和解”と書いた書道のデモンストレーションを披露した。翌日の閉会式のスピーチで、埼玉県国際友好事業協同組合の榊たか子理事長は「昨日8月15日は、日本の敗戦の日でございますが、私はこの日は世界の平和が始まった日だと思っています。昨日の“文化の夕べ”では、アジアの人々が融合して本当に素晴らしい舞台が繰りひろげられました。フランク・ブックマン博士が日本は『“アジアの灯台”になれ』と言った言葉を今思い出して、日本人としてアジアの平和、そして世界の平和を願うと同時にその責任を感じています。そして命ある限り平和のために努力してゆきたいと思います」と語り、会場から拍手がわき起こった。

▼ 産業人会議

正しい価値観に支えられた未来の創造に向けて

コービジネス・産業人会議（以下CCBI）は70年代初頭に、「ビジネス・産業人は利益追求のみを目的とし、弱者を搾取する社会の敵である」というイメージを払拭するために欧州のビジネス・産業人によって始められた。CCBIは、そのイメージに反論しようとするものではなく、新しい社会を築く為のビジネス・産業界の役割は何かを話し合い、倫理・道徳的価値観とビジネスの価値観の統合を進め、それを仕事を通じて参加者が実践していくことで社会貢献を行ってきた。もう一つのCCBIの目的は、当時高まりつつあった欧米市場での、日本産業と欧米産業界間の摩擦の回避と相互理解の促進であった。以来、会議への日本産業人の貢献は高く、世界でも珍しい日米欧のビジネス・産業人が互いの良い慣行を学び合える会議となった。

今年のCCBIは次の6つのフォーラムによって構成された。①メディア産業人による「国際コミュニケーション・フォーラム」(ICF)、②若手ビジネス・産業人による「ジュニア円卓会議」、③グローバル化への企業の対応を話し合う「国際ビジネス倫理」、④企業の生存競争に



●国際コミュニケーション・フォーラム (ICF) でのパネルディスカッションの様子

よる「コストカット、ダウンサイジングの是非を問う」、⑤「利潤と人間の尊厳」、そして、⑥「雇用・失業問題」。

現在のビジネス・産業界を取り巻く最重要課題の一つに「グローバル化」の問題があるが、CCBIの焦点は、「新しい時代の挑戦を受け、新しい社会を築く為のビジネス・産業の役割は何か」を探ることである。オープンスピーチでドイツのスタンダック教授は次のように述べた。「グローバル化の進展とその結果を見るにつけても、我々はいかにして倫理をこのグローバル化の中心に位置付けることができるかについて真剣に考えなければならない」。また、彼は経済効率だけでなく社会的影響について、大企業の意思決定者が集まり話し合えるコーのような場所がさらに必要だと述べた。そして、ビジネスにおける普遍的価値観と、グローバル標準としての倫理観を持つことの重要性にも言及した。

国際コミュニケーション・フォーラム (ICF) では、紛争地域におけるメディアの役割について発表があった。北アイルランド、バチカン、南アフリカから、メディアが紛争において問題の一部にも紛争解決の一部にもなり得る事例が数多く示された。メディアは、例えば憎悪や偏見にみちた報道を続ければ、武器以上のダメージを人間に与え、民族間に流血を呼ぶ原因ともなり得る。紛争地域では、バランスの取れた真実の情報を与えるのは非常に難しいことであるが、一方、メディアは異なる民族や国の間に対話や信頼関係をもたらす能力も有している。紛争地域のメディアに携わる人々にとって、最大の問題は自分自身の良心にあると言えよう。

ビジネス・産業は人々のニーズを市場を通して満たす重要な仕事である。この分野に関わる個々人がいかなる信念、信条、倫理、ビジョンを人生に持ち、ビジネスを通してそれらをいかに社会に実現させていくか、という問いはいつの時代でも重要なテーマの一つであるに違いない。

第13回コー円卓会議 (CAUX ROUND TABLE)

グローバル経済社会における節義あるビジネスリーダーシップ - 課題と責任について

コー円卓会議は、毎年7月（昨年は7月）にスイスのジュネーブ近郊にあるコーという小さな村のMRA会議場で開かれているが、今年も7月19日から22日まで4日間の会期で開催された。

今年は特別ゲストを含め日米欧から41名の経済人、国際機関や団体関係者が出席し、昨年同様『グローバル企業が世界で果たすべき役割・責任は何か』に的を絞って自由な討議を展開した。今年は様々な意味で、昨年までとは異なる特色・成果が見られた。



▼今年の特徴と成果

- ①コー円卓会議と課題や問題意識を共有する国連、OECD、ILO、世銀等の国際機関や民間団体の代表が出席し、今後協業を深めることで合意したこと
- ②日本の立場としては、経団連から『企業行動憲章部会』メンバー3名が参加し、積極的に発言されたこと。更に、国内では今後経団連を活動の中核に置いて傘下の企業に働きかけを行なうこと等で基本的に合意したこと
- ③昨年は、ポジションペーパー策定に関する議論に多くの時間が取られたが、今回は、今後の具体的なアクションに関する議論に多くの時間を割くことが出来たこと
- ④日米欧夫々若干考え方に相違は有るものの、今後、アジア諸国、中南米にもコー円卓会議の活動拠点を作るなど、コー円卓会議の活動範囲を拡大し、世界的に影響力を広めることに基本的に合意したこと



●第13回コー円卓会議 (CRT) の風景

会議概要

【会議目標】

- ・グローバル経済社会の中で節義あるビジネスリーダーシップ (Principled business leadership) がいかに重要であるか理解を深める
- ・コー円卓会議 (以下「CRT」) が国や地域、更にグローバル社会で「触媒」たり得る課題を明確にする
- ・CRTが、国ごとの活動拠点、中間会議や年次会議での活動を通じ、グローバルビジネス組織として戦略的な展開を図るための新たな方向を探る
- ・CRTが他の国際機関やビジネス組織との協業を進めて行くための基準や目標を明らかにする

【主な結論・合意事項】

- ① CRTの基本理念である『節義あるビジネスリーダーシップ (Principled business leadership)』の考え方を、世界のグローバル企業を主たるターゲットとして今後とも更に積極的に普及・PRして行く
- ② 具体的には、『企業の行動指針』と『Position Paper』をワンセットのツールとして、各企業への普及活動を積極的に行なう
- ③ 『企業の行動指針』の改訂/拡充について
 - ・当面現状のままでも存続させる
 - ・但し、近々委員会を設置し、『改訂』の可否、範囲、方式などの検討を行なう。(その目的に沿う意味で、現行『企業の行動指針』が各国の企業やNGOからどう評価されているかを把握するためにアンケート

第13回コー円卓会議 (CAUX ROUND TABLE)

調査をすることが提案された)

- ・『企業の行動指針』の実際面への適用をし易くするためのツールを作る。その一つとして、各企業の「企業行動要綱」類の実際例 (best practices) を収集・調査し、「実施実例集」として別冊添付する (調査は、④の各機関・団体の協力を仰ぐことが望ましい)
- ・出来れば、企業行動を倫理面から評価 (格付け) を行なうための基準を作成する

④今後、他の関連国際機関、学会・団体との協業を一層強化する計画だが、先ず情報交換、関連会議への出席等を相互に行なう。

- ・国際機関としては、UNCTAD (国連貿易開発会議)、OECD (経済協力開発機構)、世界銀行、ILO (国際労働機関) 等
- ・団体/学会としては、経団連、関経連等の経済団体、日本経営倫理学協会、日本監査役協会、各国経営倫理関係 NGO 等が対象となる。

⑤CRT内部の組織・体制を見直し、アクションを重視する組織に移行するための改組を行なう：

- ・CRT全体の動きとしては、CRTを従来の日米欧3極体制から、アジア、南米諸国等も包含した名実ともにグローバルな組織に拡大させる
- ・各国には、具体的活動の中心となる拠点を設置して行くが、日米欧各地域内の体制をどうするかは今後の議論を待つことにする
- ・最高意志決定機関としては従来通り運営委員会を置くが、この運営委員会を効率的に機能させるほか、これを補佐する意味で、World Advisory Councilを新たに設置する
- ・年次会議 (Global Consultation) をコー以外の場所で開催してはどうかという意見が出されたが、少なくとも来年はコーで開催する

会議の印象について

今回経団連代表として、『企業行動憲章部会』の小野敏夫部会長以下2名の方が会議に出席された。以下、小野部会長がご帰国後月刊Keidanren9月号に発表された『グローバル社会における企業倫理を求めて- スイス・コー円卓会議に参加して』の一部を抜粋掲載する：

.....会議では、初日の第一セッションで日本経済に焦点が当てられた。これは、企業不祥事もさることながら、やはり、日本経済の先行きにメンバー一同が重大な関心を寄せていることを示すものであろう.....私からは、企業行動憲章の改定などの経団連の企業倫理に関する活動や、経済界ならびに政府が一丸となって総会屋との絶縁をはじめとする企業倫理の確立に取り組んでいることを説明した。

....経団連の企業行動憲章に対しては、ある国のメンバーから、「われわれが作った憲章より優れている」とのコメントがあるなど、評価する意見が多かった。

.....今回、コー円卓会議に参加して改めて認識したのは、企業の倫理や行動のあり方を考えることは、グローバルに活動する企業にとって世界共通の課題であり、かつ責務でもあるということである。とくに今回、われわれが刺激を受けたのは、欧米の参加者たちからの、われわれの考えを超えた高邁な発言の数々であった。いずれも自国の問題よりも、グローバルな視点から堂々と具体的な提案や意見を述べていたのには、驚きもしたし、頭の下がる思いであった。

また、時として、日本側に対して、日本はアジア諸国の企業行動面においても、リーダーシップをとってほしい旨の発言が飛び出したりして、総会屋問題など国内の当面の課題のみに汲々としているわれわれが、いささかたじたじとなる場面もあったが、大いに考えさせられるところがあった。

今後、コー円卓会議に代表されるような国際的な議論の動向を十分踏まえながら、企業の倫理や行動のあり方全般について、広く議論を積み重ねて行くことが重要だと思う。

コー円卓会議日本側出席者 (50音順)

①稲岡 稔	(株) イトーヨーカ堂	取締役渉外業務室長	【スタッフ】
②小笠原 敏晶	(株) ニフコ	取締役社長	
③小野 敏夫	日本電気 (株)	監査役	・岩崎 一雄 (社) 経済団体連合会
④賀来 龍三郎	キヤノン (株)	取締役名誉会長	社会本部企業・社会グループ
⑤金子 保久	松下電器産業 (株)	国際関係担当顧問	
⑥沼田 陽一	日本電気 (株)	国際関係顧問	・田中 章博 キヤノン (株) 特別渉外室長
⑦松村 矩雄	日産自動車 (株)	取締役欧州日産社長	
⑧水谷 克己	東京電力 (株)	総務部長	・清田 和彦 (社) 国際MRA日本協会
⑨矢野 弘典	(株) 東芝	欧州東芝社長	コー円卓会議日本事務局 (コーディネーター)

入会のご案内

① 国際MRA日本協会は文部省認可の社団法人です。MRAでは、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する活動を行っています。その事業の充実、発展を図るため下記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼び掛けています。

■入会申し込み方法

所定の入会申込用紙に必要事項をご記入の上、会費をお振込下さい。
郵便振替口座
口座番号 00180-0-38289
口座名 社団法人 国際MRA日本協会

■会員の皆様への特典

- ① 内外のMRA国際会議やセミナーなどへの参加 (国内外の方々と交流できる機会となります)
- ② 機関誌IMAJニュース等(年4回)の送付
- ③ 講演会/例会等への参加

	個人年額	法人年額
正会員	6,000円	50,000円
賛助会員	3,000円～	50,000円～

※詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

■1998年度の主な活動予定(国内・国外)

10 Oct	日本	MRA発足60周年記念集会	10月25日
12 Dec	スイス	ニューイヤー会議	12月26日~1月2日
	インド	第8回MRAアジア・太平洋青年会議	12月28日~1月7日
1 Jan'99	インド	青年スタディーコース	1月8日~2月12日
3 Mar	南アフリカ	MRA世界連絡調整会議	3月4日~11日

■事務局だより

- 今回、MRA ワールドニュースは紙面の都合上お休みさせていただきます。
- 台湾でアジア青年会議 (AYM) 開催
台湾で去る7月31日から8月6日にかけて、「21世紀への道義的・精神的リーダーシップを求めて」という総合テーマのもと、MRAアジア青年会議 (AYM) が開催されました。この会議には、地元台湾からの6名の参加者を初め、韓国、フィリピン、マレーシア、そして日本 [百川亜芸さん (学生)、福本真紀さん (学生)] から総勢16名が参加しました。今回この会議では次世代を担う若い世代を中心として、各国のユース活動に関する情報交換を初め、MRAの国際的ネットワークを基盤に、21世紀に向けてアジア太平洋地域の若い世代の人々が相互に交流・協働し合うための具体的なアクション・プランの検討や、今後の活動の方向性、そして協力の方法等について話し合いが行われました。

●ホームステイ受け入れ先募集!

海外からMRA関係者が来日された際、ホームステイの受け入れが可能な方を募集しています。東京もしくは東京近郊にお住まいの方でホームステイ受け入れが可能な方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡下さい。

■会員数

(平成10年10月16日現在)

- ①個人・正会員
現在会員数 395名
- ②個人賛助会員
現在会員数 137名
- ③法人正会員
現在会員数 12社
- ④法人賛助会員
現在会員数 71社

■来日海外ゲスト

(8月~10月)

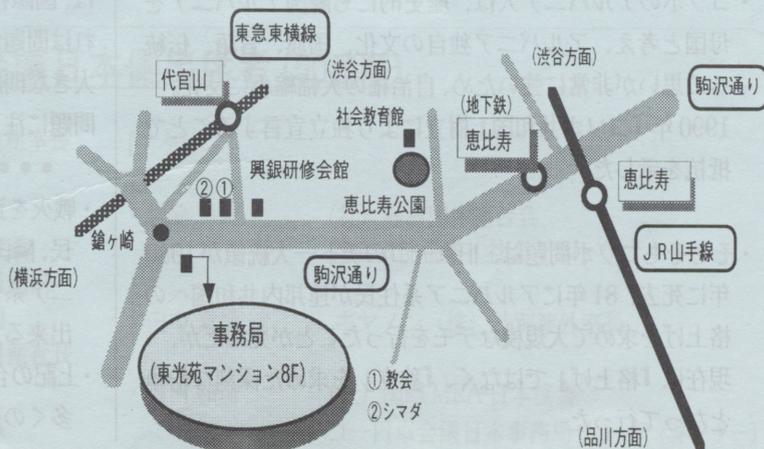
- ・ジョティー・スプラマニヤンさん (インド)
- ・ヴェロニカ・クレイグさん (イギリス)
- ・クリア・レゲットさん (ニュージーランド)
- ・リュウ・レンジョウさん (台湾)
- ・チョン・ヨンヌク夫妻 (韓国)
- ・カン・ソッキュさん (韓国) 他7名
- ・フェツウ・パウロさん (西サモア)

国際MRA日本協会 事務局案内図

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 3-7-5
東光苑マンション802
TEL:03-5721-6861
FAX:03-5724-6880
E-MAIL: LEB03055@niftyserve.or.jp

●最寄駅

- JR山手線 : 恵比寿駅西口下車 徒歩7分
- 地下鉄日比谷線 : 恵比寿駅5番出口 徒歩5分
- 東急東横線 : 代官山駅 徒歩4分
- 東急東横線 : 中目黒駅 徒歩5分



コー世界大会参加 体験記

(社) 国際MRA日本協会 副会長

相馬 雪香



●相馬雪香副会長（左）と榊たか子理事（右）

今年もコーに行くことが出来たことを心から感謝しています。榊たか子さんと私、併せて160歳を超える二人です。

コーに来て心が洗われる、確かにそうです。清浄な空気、見上げれば雲一つない青い青い空（たまには凄い雷雨もありますが）、会場のマウンテンハウスの素晴らしさ、行き届いた心配り。今年も600名もの人々が60ヶ国から集まっています。7月11日に始まり、8月23日まで続いた大会のプログラムは多様でした。1996年7月にコーを訪れたチベットのダライ・ラマ14世が「21世紀を対話の世紀に」と言われた言葉に呼応して、ヨーロッパにおけるイスラム社会との新しい共生の道を求めるワークショップが開かれました。

異宗教間の融和と理解を目指し、イスラム、仏教、ユダヤ教、カトリックの僧侶の方々の話も行われました。ある日本人参加者は、「私はふるさとを持っていませんが、ここへ来てふるさとに帰った様な気がします」と語っていました。環境がまるで違い、言葉も場合によっては通じない人たちも、ここでは心が通いあいます。どうしてだろう、なぜだろう。コーを今日あらしめている数多くの人たちの思いと献身があつてのことだとしみじみ感じています。

私は「過去を癒し、未来を築く」のセッションに参加しました。国家レベルの癒しの必要は目に見えていますが、私の心に秘められた傷が癒されることの大切さを感じさせる何かがコーにはあります。

日々日々につもる心のちりあくた
洗い流してわれを尋ねん

二宮尊徳の道歌が心に浮かびました。私の毎日が忙しくなります。

今年のハイライトの一つは、2年前に羽田孜、鳩山由起夫両氏の呼び掛けで行われることになった「政治家の円卓会議」でした。2

回目の今回は、スイスの議員と共同の呼び掛けとなりました。残念ながら、国会の関係で日本からは藤田幸久氏だけが出席しました。22ヶ国から30数名の政治に関わる人たちが集まりました。袴を脱いで、コーの雰囲気の中で本音で語り合うユニークさがありました。ここ30年紛争が絶えたことのないという国の代表が、皆の話聞いた後でいいました。「自分の国だけが問題を抱えているのではないということが分かった。お互いに知り合うこと、助け合うことの大切さを身にしみて感じた」。中華人民共和国からも大韓民国からの参加者もいました。パキスタンの代表も苦衷を語っていました。「また来年もぜひ」が結論でした。

コーの魅力は何といても個々にもつ会話です。食卓を囲んで、普通では会えない人と心を開いて話し合うことができるのです。若い人たちもたくさん来ています。「大学2年の時コーラスでMRAのことを知り、心に惹かれやってくる事が出来ました」と語る韓国の青年もいました。「自由を与えられたけれど、方向が分からなくて」と語るロシアの若い人たち。ベトナムの難民でオーストラリアで育った人等々。

「徳は孤ならず、必ず隣あり、ですね。そして徳イコールMRAですね」とは韓国MRAの姜錫圭会長の言葉です。台湾のリウ博士の唱えられる「良知教育」もイギリスの退職した教師によって紹介されていました。

コーの大会期間中、コー学生プログラムも同時進行で行われます。今年6年目。「紛争の解明」というテーマで4週間かけて勉強をしていました。21世紀に期待される目標と価値観を話し合う最後のセッションで、世界60ヶ国に支部を持つ汚職と取り組んでいるNGOのイタリア支部長が、「汚職は必要悪ではなく、昔より今の方が一般の人が黙ってなくなりました」と口火を切りました。「汚職は経済を停滞させ、貧しい国をさらに貧しくし、貧富の差は増すばかり。いつの間にかお金に神の座を譲ってしまった」「一人ひとりにすることがある」というのが結論でした。

コー円卓会議に 参加して

株式会社イトーヨーカ堂
取締役渉外業務室長

稲岡 稔

7月半ばのジュネーブはこのほか暑かった。それでもレマン湖の北岸を東へ約1時間半走り、モントルーから急な坂をコー（Caux）まで登ると、風はひんやりと心地よく、ホテルの中は冷房もしてないのに涼しかった。丘の上の小さな村コーは標高1,054メートル、レマン湖に面した優雅なホテルで「コー円卓会議」は7月19日から22日まで開かれた。

参加者は、日米欧の産業人、学者や国連、ILO、OECDの代表ら41人。ほかに支援スタッフ、事務局、会議運営のボランティア、ベテラン同時通訳者ら約30名が熱心に協力された。

第13回目となった今年の会議のテーマは、「グローバル経済社会における節義あるビジネスリーダーシップ：責任と課題について」であった。

朝8時の朝食、9時から6時までの中味の濃い論議、そして6時半からのお酒の入らない夕食と、1日中熱心な論議、論議の連続であったが、論議の中味の濃さとは逆に、参加者はおたがいすっかり打ちとけて、別れる時には長年の親友のような感じで握手しあった。やはり仕事をしている国や分野は違っても、それぞれの理想と使命感をしっかりと共有しているという信頼感と、おたがいへの尊敬の念が参加者全員を結びつけていたのだと思う。

会議を通じて考え続けていたことが三つある。

第1に、日本人の行動と日本のシステムに対する欧米の人びとの見方のあまりの厳しさ。すでにそのことはあちこちで指摘されているが、やはりその見方は不信感、失望といえるほどにまで深刻になっている。

会議中の発言でも、「日本のビジネスは文楽だ。表でやっていることは、後からあやつられている。しかも統制されたビジネスだ。日本で最もむづかしいことは、透明性を打ちたてることだ。だれも適切な情報をくれない。知っていてもいわない。日本の状況がどれくらい深刻かということ、だれも知らない」といった意見が出された。

食事やコーヒー・ブレイクの中の軽い話のときさえ、「日本の金融機関は不良債権を7年も8年も放置してきたが、なぜ日本人はそうしたことを許しているのか」とか、「日本が変化しようとしていることを認めないわけではない。しかし、その変化のスピードは、あまりにも遅いではないか」などという意見をあちこちで聞いた。わが国の政界のあり方についても辛辣なことをいわれた。

第2に、会議を通して感じたのは、参加者の志の高さ、使命感の高さ、といったものである。CRT（Caux Round Table）のウィンストン・W・

ウォリン議長も、冒頭の基調講演の中で、「ビジネスは理想を持つべきだ。理念に燃えたビジネスリーダーを作っていかなければならない」と熱っぽく訴えかけていたが、こうした意識は参加者に共通していたと考えている。

今回の会議のテーマとなった「Principled Business Leadership」も、一応は簡単に「節義あるビジネスリーダーシップ」と訳されているが、会議を通して議論を聞いていて、いわば、「明確な理念を持った産業界のリーダーシップで、社会を高潔、公正な方向へと変えてゆこうとする動機」といったものではないか、と私なりに思った。

そして第3に、以上の2点から導かれる当然の帰結として、これからのわが国は、国をあげて社会構造の変革に取り組み、公正、高潔で透明性のある社会、諸外国から見ても国民一人ひとりの目から見ても、さまざまな社会システムが理にかなった、わかりやすい国へと変えてゆかなければならない、ということである。

これは容易なことではない。

戦後半世紀、いわば必死の思いで走り続け、経済的に成長し続けてきた奇跡の戦後復興の成功体験をいったん否定して別の価値観をおたがいの基準とし、新たな社会構造へと作り変えることを意味する。

いや、それは戦後半世紀だけの社会システムの再構築にはとどまらないだろう。野口悠紀雄東京大学教授のいわれる「1940年体制」の再構築であり、明治維新以来の国づくりのあり方、一人ひとりの生き方の転換であり、何百、何千という世代を超えて受け継がれてきた稲作民族としてのムラ社会意識の大転換を意味するのだろう。

当然、わが国のさまざまな分野で整合性のある価値観を主導し、調整してゆくリーダーシップが求められるのだが、それは本来、政治の果たすべき役割なのだろう。

午後9時頃になってようやくたそがれが湖面の青さを一層濃くし、湖畔の家々に明かりがともるころ、ホテルのテラスの椅子に座ってこんなことを行きつ戻りつ考え続けていた……

会場となったホテルは「コー・パレス」という名で1902年に建てられたが、10年余りしか平穏な日々を送ることが出来なかった。

第1次世界対戦の勃発で1914年、いったん閉鎖され、第2次世界対戦中は亡命ユダヤ人たちの収容所として使われていたという。

そしてこのホテルで1986年から毎年夏に日米欧の産業人が集まって共通の関心事を論議するCRTが開かれている。発足した当初は、日本からの集中豪雨的輸出により年ごとに厳しさを増していた貿易摩擦が最大のテーマだったという。

1994年には有名な「企業の行動指針」（Principles for Business）がとりまとめられ、各国の産業人に大きな影響を及ぼしてきた。

スタートして13年、日本問題に端を発したCRTは再び別な、より本質的な「日本問題」を大きな課題の一つとして取り組むようになったといえよう。（雑誌「経営倫理 No.4」から抜粋：紙面の都合上一部を省略して掲載しました）